Keywords：多田富雄、佐藤弘弥、わたしのリハビリ闘争、リハビリ日数制限、鶴見和子、邂逅

JanJan　文化欄　2007 年 12 月 4 日

書評　多田 富雄氏の新著　「わたしのリハビリ闘争」を読む
- 最弱者の生存権は守られたか -

佐藤 弘弥

青土社　価格：￥ 1,260（税込）
発売日：2007-11-19

世界的な免疫学者多田富雄氏は、2001 年、脳梗塞で左半身のマヒと声を失い、前立腺癌と闘いながら、リハビリ難民と呼ばれる社会的弱者の先頭に立って、厚労省による容赦のない患者切り捨て政策の白紙撤回を叫んでいる。ハンディを負った「知の巨人」の凄まじい生き様に読者は何を見るだろう。

多田富雄先生の新著「わたしのリハビリ闘争　最弱者の生存は守られたか」（青土社　12 月 10 日刊）が届いた。

多田先生は、2001 年旅先で脳梗塞に倒れ、左半身マヒと声を失った。その後、必死のリハビリに専念しながら、自らの運命と闘って来られた。この間、リハビリ医療によって、徐々に歩行やコンピューターによる一文字一文字入力訓練によって、執筆活動ができるまでに回復された。

多田先生にとって、リハビリ医療は「生きる希望」そのものだった。だが、2006 年 3 月、多田先生は、残酷な通告を受ける。

> **「話は 2006 年 3 月にさかのぼる。東大病院でリハビリ医療を受けていた私に、信じられない通知が告げられた。今度診療報酬が改定されて、公的医療保険で受けられるリハビリ医療に、上限日数が設けられた。あなたのような脳梗塞の後遺症の患者は、発病から 180 日を上限として、治療を打ち切らなくてはならない。まことにお気の毒なことです、というものであった。」**（前掲書　11 頁）

多田先生の「生きる希望」は、あっけなく打ち壊された。この日から、多田先生の人生が変わった。先生は、直ちに朝日新聞「私の視点」に「診療報酬改定　リハビリ中止は死の宣告」（本書　1 に所収）を投稿して、世論を喚起した。

日本中から次々と、多田先生の発言に共感を示す個人や団体が現れ、5 月 11 日からわずか 6 月 24 日の間に、日本中から 44 万 4022 人もの人がリハビリ医療制度改悪に反対する署名を行っ

たのである。このことは、リハビリ医療を「生きる希望」として生きている人々が、いかに多いかを物語るエピソードだ。こうして、図らずも多田富雄先生は、リハビリ医療を必要とする多くの人々の「希望の星」となってしまった。

多田富雄先生は、この理不尽な政策との闘いの中で、ひとりの掛け替えのない知人を失った。その人物は、内発的発展論の思想で国際的社会学者として著名な鶴見和子氏（1918－2006）である。1995 年に脳梗塞に倒れた鶴見氏は、リハビリに希望を見出し、京都に引っ越した上で、必死のリハビリをされてきたが、2006 年リハビリ医療の打ち切りを宣告され、僅か数ヶ月後に亡くなってしまった。（本書　5、9、11 に所収）

鶴見氏はこのような言葉を最後の著「遺言」（藤原書店　2007 年 3 月刊）に遺した。

> 「戦争が起これば、老人は邪魔者である。だからこれは、費用を倹約することが目的ではなくて、老人は早く死ぬ、というのが主目標ではないだろうか。老人を寝たきりにして、死期を早めようというのだ。したがってこの大きな目標に向かっては、この政策を合理的だといえる。そこで、わたしたち老人は、知恵を出し合って、どうしたらリハビリ尾が続けられるか、そしてそれぞれの個人がいっそう努力して、リハビリを積み重ねることを考えなければならない。老いも若きも、天寿をまっとうできる社会が平和な社会である。したがって生きぬくことが平和につながる。この老人医療改定は、老人に対する死刑宣告のようなものだと私は考えている。」（前掲書　170－171 頁）

鶴見氏の病床には、辞世とも言える次の歌が遺されていた。

”政人（まつりびと）いざ事問わん老人（おいびと）われ生きぬく道のありやなしやと”

多田先生と鶴見氏の間では、往復書簡の形式で「邂逅（かいこう）」（藤原書店　2003 年 3 月）という本が上梓されている。リハビリ医療の本質を学ぶ時、また私は現代における老いというものを考える時避けて通れない名著である。是非お読みいただきたい。

多田先生は、「誰が鶴見和子氏の命を奪ったのか」という趣旨の論陣を張って、鶴見氏の無念を晴らすように、リハビリ制度改悪の問題点を指摘し続けてきた。

この間の多田先生の、一言一言の発言は、コンピューターによって生成された声で発せられたものである。一言一言の入力作業も、私たち健常者の何倍もかかる大変なものだ。また先生は、現在前立腺癌の再発とも闘っている。そんな状況にある先生が、己のありったけの命の火を燃やしてこのリハビリ問題と取り組んで居られるのである。

先生の姿を思う時、私は聖地に向かって五体投地をしながら巡礼をする人々を思い自然と頭が下がるのだ。

Keywords：多田富雄、佐藤弘弥、わたしのリハビリ闘争、リハビリ日数制限、鶴見和子、邂逅

にもかかわらず、厚労省は、このリハビリ医療制度に対する緩和措置を発表したものの、そこには明確に「改善の見込みのあるもの」との差別的なハードルを外そうとしない。これは経済原則に基づいた患者の人権無視の医療制度に他ならない。

改善の見込みがないものは、リハビリを受ける権利がなく、死ぬ以外にないとすれば、これは「リハビリ難民」というよりは、国家による「棄民制度」そのものではないだろうか。

2006 年からこれまで、多田富雄先生のペンの力で明らかになった社会矛盾の残酷さを思いながら、私は、かつて世界中から、羨望の眼で見られた日本の「国民皆保険制度」そのものが、完全に崩れ去りつつあるのではないかと思った。

2007.12.4　佐藤 弘弥

ご意見欄

[31527]　思い出しました
名前：山口一男
日時：2007/12/08 09:23
この記事を読んで思い出したことがあります。アメリカ映画 1973 年作のソイレント・グリーンです。SF 仕立てですが人口増加で、極度の食糧不足に浸った 50 年後（2022 年）の米国、働けなくなった老人は「ホーム」と称する「安楽死」用施設に送られ、死体は実は加工されソイレント・グリーンと称する職労不足対策用に作られた食物に変わる、というホラーSF 映画で、真相を暴く刑事役がチャールトンヘストン。友人の老人がホームで安楽死を迎えるのに、最後に好きな曲を選べてそれを聞きながら死んでいくのですが、選んだ曲がベートーベンの田園で、映画を観た後暫くは吐き気がして田園を聞けなくなりました。形は違うとはいえ、もう役に立たなくなったと考える人間を切捨てる、現代の姨捨山ともいえる、この医療制度改悪を、何とか元に戻すことに参加できればと思います。鶴見さんの辞世の歌の政治への怒りと・悲しみを心に刻んでおきたいと思います。

[31525]　恥ずかしいことに知りませんでした
名前：山口一男
日時：2007/12/08 08:50
佐藤記者、この記事をありがとう。リハビリに対するこのような制度改悪は知りませんでした。まして鶴見和子さんの死までそれに関係した可能性があるなんて悔しい思いです。署名活動の件ですが、プライバシーの問題があるといっても、実名と本人であることの確認なしに実効性のあるものなのでしょうか。いずれにせよ、このリハビリに関する医療制度改悪反対の署名集めを JANJAN 記者・読者有志の形でするなら、参加します。それからこれからも関連記事をお願いします。

[31512]　本記事を有難く拝見。
名前：中村孔治
日時：2007/12/07 19:53
佐藤記者の何時もながらの核心をついた記事を有難く拝見致しました。 本記事は、我々自身

や家族や身近な人々にとってやがて、現実のものになる可能性のある大切な問題に関するものと存じます＜現時点、NHK・TV・１CH『特報首都圏』放映中のビデオ録画中です＞。
さて、多田富雄氏は 1971 年、抑制 T 細胞の発見等の成果を挙げ、第一級の免疫学者である事は言うまでもありません。氏さらに、随筆家、能の作者などとしても知られておりますね。 徒に馬齢を重ねた私より、多田富雄氏は 8 歳も、若いわけですが、氏は 2001 年に脳梗塞で、右半身不随となりました。 しかし、往復書簡として故鶴見和子さんと『邂逅』（藤原書店）、柳澤桂子さんと『露の身ながら』（集英社）を刊行され、その不屈の魂にも、心より敬服いたしております。その上、本記事の如く、2006 年にはリハビリ制度打ち切り反対運動の先駆者として立たれ、現在も世に警鐘を鳴らし続けておられます。氏はまた、人類の平和を願う一人の能作家として『無明の井』、『望恨歌』、等があることでも有名ですね。私は特に、アインシュタインの相対性理論を主題とした『一石仙人』、広島の被爆を主題とした『原爆忌』を機会があれば、見たいと思っています。 私より若い優秀な人たちが、病気になったり、世を去られるのは大変残念に存じております。 JANJAN で、出会った、極めて優れた後輩である、田口汎氏もそうです。佐藤記者の本記事を読みつつ、彼の文章、【わたしが能で「後ジテ」に興味を持ち始めたのは、「霊魂の存在」を信じようと信じまいと、あの方々＜註；戦死された多くの優秀な若人達＞が「霊魂」でも「怨霊」でも「後ジテ」にでもなって、再び現世に姿を現してくれたらと願うからです。】を想起いたしました。 今後も長く皆様から種々勉強をさせて頂きながら、残された日々を精一杯、有意義に過ごす心算でおります。

[31510]　「インターネット署名活動」のご提案は妙案です！！
名前：佐藤弘弥
日時：2007/12/07 17:43
伊吹春夫 様
　こちらこそ伊吹さんの最近記事の充実振り、敬意を表しながら拝見しています。 伊吹さん、ご提案の「インターネット署名活動」の提案は妙案です。 JANJAN 編集部様、是非この伊吹さんのアイデアを実現の方向で考えていただけませんか。 それと、この伊吹さんのご提案は、多田先生の「リハビリ医療制度」の問題に限らず、さまざまにことに広がる可能性があります。ここから政党への政策提言も可能になるかもしれません。 まず署名活動に値する問題であるかの判断後、署名コーナーを設けて、カウント数を表示させます。もちろん署名者のプライバシーの問題もありますので、名前は入力するにしても表示はさせないのが原則になるでしょう。そしてその署名活動中の問題に対するご意見、あるいはコメントコーナーを設ける。そして集まった署名については、それを必要とする団体・個人に届ける。多田先生たちの署名活動は、すでに終わり、40 数万件の署名簿は、厚労省に届けられていますが、新たに、JANJAN にて、これだけの数が集まったとなれば、新たなスタートになると思われます。
この件に関し、皆様のご意見をお聞かせください。　佐藤弘弥

[31508]　いつか行く路
名前：伊吹春夫
日時：2007/12/07 12:53
　佐藤記者に敬意！これは経済原則による人権無視の医療制度に他ならない。「私の仕事館」を

Keywords：多田富雄、佐藤弘弥、わたしのリハビリ闘争、リハビリ日数制限、鶴見和子、邂逅

作るお金はあるのに、命をつなぐ福祉の予算を一律削減する政策には納得できません。私達がいずれ必ず通らなくてはならない路なのですから、１人でも多くの市民が「路線変更」を叫ぶ時だと思います。　田舎では署名すら出来ませんので、この板を使わせていただきます。

「インターネット署名運動」を提案したい。

「インターネット署名運動」を真剣に検討しましょう！

リハビリを考える市民の集い（2007 年 3 月 10 日　両国 KFC ホール）佐藤弘弥氏撮影